13. 描画法に見る治療経過の評価：家族構成の変化に より精神・身体症状を呈した一症例
第一萩田大森クリニック① LCCストレス医学研究所②
東京医歯大学医学総合研究科③ 日本大板橋病院
心療内科④
○小野 幸子⑩ 渡辺 満子 大森 啓吉①
桂 戴作⑩小野 繁⑩村上 正人⑩

臨床心理療法でクライエントに対する治療法の選択 は、多岐にわたり、単一の治療法のみによる治療結末 は少ないと考える、いくつかの治療手段を用いての治 療の状況と経過を評価することにあたり、描画法を用いる ことで治療経過が明確に示された症例を経験したので 報告した。症例は家族構成の中で家族構成に変化が 起きて、それまで家族構成の中小集団として、クライ エントと観察はその中で和を保ち、バランスをとって いた。家族構成が変化し、家族構成、相談への親 子関係、家族構成を再構築する必要に迫られたとき、 両親とクライエントは向き合ざるを得なくなり、家 族としての役割分担の不明確さが浮き彫りにされた。 今までの家族関係による生活かたでは対応しきれない 状況になったクライエントは、精神的な不安定状態と 身体症状を呈した、同時に幼児期の在り方も問わ れることになり、家族構成から核家族への移行時にみら れる家族内不安が、子どもに表れた。この治療経過 の中で、治療の経過を描画法を用いた、クライエン トからのメッセージを読み取る描画法は、客観的な治 療経過の評価として有用な方法の一つと考えられ、 症例の治療経過とその治療法、描かれた絵の評価に ついて報告した。

14. SDS高得点群の特性に関する研究（第一報）: CMI身体愁訴におけるSDS低得点群との差異に よって
東京医歯大学医学総合研究科口腔心身医学① LCCストレス医学研究所心療内科②
○小野 繁⑩ 渡辺 満子 チェイ⑩ 小野 幸子⑩
桂 戴作⑩
心身医学的なアプローチを必要とする症例では、初 期の診断・治療には比較的正確に早く情報を得ること が望まれる。その一つに質問紙法によるテストがあり、 これらのテストは治療時間の短縮と治療方針の補助に 用いる。中でもSDSは二つ尺度として日常の臨床で用 いられており、SDSの高得点群は二つの状態の強さをよ く反映している、いくつかの質問紙法を併用することが 一般的で、SDSとCMIは同様に用いられている。そこでこ の両者の質問紙の関連について検討を試みた。第一報 として、SDSにみられるうつ患者と非うつ患者に診断 された群が、各々どのような身体愁訴をもっているか をCMIの身体愁訴項目から検討した。方法はSDSの 得点により2群に分け、群の差を検討する高 得点群（SDS-50点以上）、第2群はうつの疑いのな の低得点群（SDS-39点以下）とした。両者の間にCMI の選択された身体愁訴項目の有無を検討した、その結果、 うつの疑いのない群の愁訴項目とうつ状態群の愁訴項 目群には明らかに差異と特徴が認められた。SDSと CMIの間に有意な関係があることが認められたので 報告する。

15. Self-rating Depression Scale（SDS）に関する研 究（第一報）：各質問項目に対する反応の様態につ いての検討
東京医歯大学医学総合研究科口腔心身医学① LCCストレス医学研究所心療内科②
○清水 チェイ⑩小野 繁⑩ 小野 幸子⑩
桂 戴作⑩
心身医学的診断・治療の補助的手段の一つとして、Zungらの開発した自己評価尺度（以下、SDS）がある。本法は、20項目の抑うつ状態をチェックする項目から構成され、主症状、消化の障害症状、心理的隨伴症状を評価する質問紙法で、日常臨床で 使用頻度は高い、今回われわれは、SDS高得点群の 身体愁訴質問項目への反応状況を明らかにしたいと考え、SDSの再検討を試みた。LCCストレス医学研究所 心療内科で受診した患者より、無作為に抽出した123 例をSDS-39以下群（n=36）と50以上群（n=38）の 2群に分け、両群間の各質問項目に対する反応数の有意 差と反応順位を検討した。両群間における各質問項目 別平均得点値の差をt検定したところ、2項目を除 くすべての項目に有意差がみられた、各質問項目ごと の反応順位は、両群間で交差することが明らかとなり、 身体愁訴質問項目への反応状況にも明らかな差がみ られ、両群間の特徴が示唆された。

16. ワーキングと心理指標との関連
東京大学医学部
○山 華龍 吉内 一浩 佐々木 直 野村 忍 久保木富房
運動が生理的機能を健全に保つために役立っている ことはよく知られているが、最近では、運動が心理面 に与える影響も次第に明らかとなってきている。しかし